

ASSOCIAÇÃO CENTRAL NIPO-BRASILEIRA

NOTÍCIAS E INFORMAÇÕES



ブラジル特報



特集

「ブラジルの世界遺産」

- ・ブラジルの世界遺産（文化遺産）
- ・ブラジルの世界遺産の分類学
- ・世界遺産セーハ・ダ・カピヴァラ遺跡と先住インディオ起源論争

あの町この町
イトゥー



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館 5 階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人：大前孝雄／編集人：岸和田仁

360° business innovation.



世界の未来を、ブラジルとつくる。

[Business innovation-1]

旅客鉄道事業に参画、400万人の市民の足を担う。
オデブレヒト・トランスポート社と共に、都市交通インフラを整え、都市の発展に貢献。

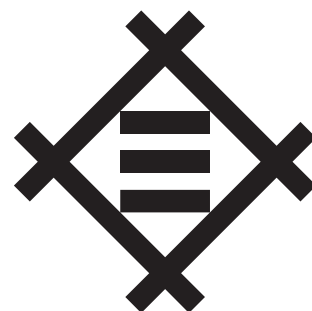
[Business innovation-2]

水力発電事業により、CO₂排出の少ないエネルギー開発を推進。
川の自然な流れを活かす流れ込み式水力発電事業を通じ、約1千万人分の電力を大都市圏へ供給。

[Business innovation-3]

ITを活用した教育事業で、次世代の人材育成に貢献。
オンライン教育事業のギーキー社に出資参画。一人ひとりの効果的な学びをサポート。

世界の未来を、世界とつくる。三井物産



MITSUI & CO.

目次

(あの町この町)	
イトゥー [小高利根子]	3
(ブラジル・ナウ)	
トップの器 [村田俊典]	5
【特集】ブラジルの世界遺産	
ブラジルの世界遺産（文化遺産） [麻生雅人]	6
【特集】ブラジルの世界遺産	
ブラジルの世界遺産の分類学 [桜井悌司]	8
【特集】ブラジルの世界遺産	
世界遺産セーハ・ダ・カピヴァラ遺跡 と先住インディオ起源論争 [編集部]	10
テメル政権はブラジルをどう変えようというのか [岸本憲明]	11
連載・ブラジル現地報告	
日系社会の実態が知りたい！ [細川多美子]	12
(日系企業シリーズ・第42回)	
日本ハムグループ ブラジル市場への再挑戦 [西裏昌弘]	13
(ビジネス法務の肝)	
ブラジルの知財政策とわが国との関わり [松田純一]	14
連載★税務の勘どころ	
非居住者に対するキャピタルゲイン課税 [加藤雅規／マルコ・クアドロス]	15
(連載エッセイ)	
リオ五輪・パラリンピックを前にして [竹田恒和]	16
(ウーマン・アイ)	
日本で働く外国人女性の悩み [松下和江]	17
(ジャーナリストの旅路)	
身につまされること [檀上 誠]	17
(連載文化評論)	
ブラジル映画新世代を象徴する 『ストリート・オーケストラ』 [岸和田仁]	18
最近のブラジル政治経済事情	19
新刊書紹介	20
(びっくり豆知識) 五輪旗は「信頼に足る」都知事に	20
協会からのお知らせ	21



写真家田中克佳の「表紙のひとこと」
「金の発掘に伴いミナスジェライス州からリオデジャネイロに敷かれた『王の道』。歴史街道沿いには豊かな文化が開花した。写真は「ボン・ジェズ・デ・コンゴニャスの聖域」と呼ばれる教会建築。世界遺産にも登録されている。」
(65年生まれ、早稲田大卒、博報堂入社。93年に退社後渡米し、独立。ニューヨーク在住。
www.katsutanaka.com)

イトゥー

サンパウロ市から真西に向かうカステロ・ブランコ街道は78キロ地点で通称「砂糖道路」と交差する。左へ行けば日本人に馴染みの深いソロカバ市、右側がイトゥー市となる。このイトゥーの名が突然日本のメディアで取り沙汰されるようになったのは2014年、サッカーのワールドカップで日本選手団のベース地と決まったためだった。

ブラジル人一般にとっては「何でも大きい街」というのがイトゥーのイメージのようだ。だが「大きなもの」は公衆電話、信号機、消火器などほんの数えるほど。あるときテレビでコメディアンが「おらが街では何でもでっかくて…」と法螺を吹いたのがきっかけで市があわてて作ったというものでそれほど歴史が古いわけではない。

この街は2010年に市政四百年を迎え、その年のサンパウロ市のカーニバルではカーザ・ヴェルデがイトゥーをテーマにパレード。その歌詞が街の歴史と特色を端的に表しているののでその一節を紹介してみたい。

♪<サトウキビでイトゥーは発展し、コーヒーで繁栄を極めた。そしてこの街で共和制の産声が上がった>♪

つまり、「砂糖産業のサイクルが終わったとき、その利益をコーヒー栽培へ投資し、そこから得た富で工業化を図ったイトゥーは、経済力の強さから国政に大きな発言権を獲得。共和制の発端となったイトゥー会議が開かれた」というもの。

イトゥー会議の開かれた家は博物館になっていて、壁には街の歴史を描いた大量のアズレージョ（ポルトガル伝統の青を基調としたタイル）。これを見るためだけでもサンパウロから出かける価値はあると思う。

歴史の街イトゥーは今も静かなたたずまいを見せ、市の中心カンデラリア教会前のパドレ・ミゲル広場には昔ながらのコレット（小音楽堂）があり、人々が思い思いにくつろいでいる。植民地時代からのポルトガル風の石畳が帰国後の今もとても懐かしく、あの古都の雰囲気をつまでも、と願わずにはいられない。

小高利根子（ポルトガル語翻訳者
在伯通算22年、イトゥー在住15年）



南米大陸夢紀行



業務渡航は弊社へお任せ下さい!!

お客様のニーズに合ったプランをご提案します。

ブラジル視察

ブラジル駐在経験のあるOBの方への
ブラジルツアーの立案

ブラジル査証取得代行

日本への訪日観光ツアー



南米観光

株式
会社

ブラジル旅行会社

BRASIL TURISMO CO., LTD.

お電話でのお問合せ

03-3593-8787

〒105-0004

東京都港区新橋2丁目12-1 ランディック第3新橋ビル2F

営業時間 [月~土] 9:30~18:00

名古屋支店 TEL:052-565-1361

E-MAIL: info@brasil.co.jp

<http://www.brasil.co.jp/>

トップの器



Morrer na praia「海岸で死ぬ」とはブラジル人がよく使う慣用句だ。海で溺れそうになり、一生懸命泳ぐが、岸にたどり着いたところで力尽き命を落としてしまう。という表現で、Eu não vou morrer na praia(海岸で死ぬつもりは無い)は転じて、頑張るなら最後までやる、諦めない。という意味。逆に、Ele morreu na praia。(海岸で死んでしまった)は、頑張ったけど、最後は駄目だったね。という意味になる。

さて、ブラジルは大統領の弾劾裁判で大きく揺れている。今回の政治スキャンダルを見ていて私が感じることを少し纏めたい。

軍政が1985年に終わり、民政に移管して30年。ブラジルの大統領制と議会（政党乱立）の関係がこの間少しずつ変化をしている。ポイントになるのは、一つは間違いなく大統領暫定令である。第二に、大統領弾劾裁判である。

1992年のコロール大統領の弾劾までを第一ステージ、2001年に行われた大統領暫定令改訂（憲法改正）迄を第二ステージ、2016年ジルマの弾劾裁判迄を第三ステージ、そして今後どうなるかわからない第四ステージに分けて考えたい。

第一ステージにおける大統領暫定令は、ハイパーインフレを抑えようと、物価統制や経済プランを発表して、国民を恐怖に陥れたこともある。どちらかと言えば悪いイメージがつきまとう。この頃の大統領は、行政権はもとより事実上の立法権を手に入れている。カラクリとしては、議会（立法府）が承認しない大統領暫定令は自分の権限で何回も延長することが出来たのである。直接選挙で選ばれた大統領がある意味暴君になることも出来た時代だ。議会は怖い存在ではなかった。

ところが、1990年に選出されたコロール大統領が「預金凍結」という、それ迄にない、驚くようなインパクトの大統領暫定令を出し、その後弾劾により失脚してしまう。コロールの弾劾の理由は直接的には不正であるが、世論を動かしたのは大統領暫定令というカードを切りすぎた大統領に対する反感である。

ここから、第二ステージが始まる。1994年、リアルプランを輝かしい成功に結びつけハイパーインフレを終息させたカルドージ大統領（当時財務大臣）である。ご存じない方も多いのだが、実はこのリアルプランも大統領暫定令で始まり2001年迄議会の承認を得られないままカルドージ大統領は暫定令を延長していたのである。

第二ステージはスーパー大統領カルドージが事実上の立法権を駆使して議会を押さえ込み、ハイパーインフレのない正しい方向へ国を導いたとも言える。

その後、未来への正しい選択と考えたカルドージは大統領暫定令の延長を禁じる憲法改正を2001年に通してしまう。つまり、議会の承認無しには暫定令は廃案となる。事実上の立法権は第三ステージでは存在しなくなった。暴君も生まれない、スーパー大統領も生まれない。民主主義が一步進んだかに見えた憲法改正であった。

しかし、第三ステージでは大きな落とし穴が待っていた。政党乱立という構図である。23の政党が存在し、かつ最大党でも下院の2割程度しか議席を持っていない。大統領の労働者党は2割以下である。立法権を剥奪された労働者党は連立という手段でしか議会で法案を通すことが出来なくなったのである。そこには、当然大統領の支持率をバロメーターにしながら連立与党内の工作が必要になってきた。当然工作には金とポスト(利権)が必要になってくる。支持率が下がれば下がるほどより多くの工作コストがかかってしまう。

大統領の支持率は先ずは経済の動向に大きく左右される。しかし、トップの器の部分も見逃せない。2億人の民の長は並大抵の器では務まらない。先進国の大統領制や議院内閣制はある意味支持率低下局面でも、議会で安定多数を有していれば為政者は自信を持って国の方向性を決められる。しかし、ブラジルの場合、事実上の立法権を失い、政権乱立という状況下においては、未来への正しいビジョン（多くは当初国民の痛みを伴う）をカリスマでカバーしながらで国を治め高い支持率を維持して行くしか方法はない。

ジルマ大統領の弾劾裁判がもたらすものは何か？ それは、さらなる大統領の非権力化である。この先、大統領は（2度あることは3度あるかも知れない）弾劾と向かい合い国の舵を取ることが必要になる。トップに器がなければ、民衆寄りの日和見大統領となってしまうだろう。すなわち、第四ステージの成功の鍵は、今後そのような器の候補者がいるかどうか？である。

ジルマ大統領の弾劾裁判の結果はまだ分からない。彼女は今でも「海岸で死ぬ」ことは考えてもいない。今は結果を見守るしかない。

この慣用句の面白い使い方は「海岸で死ぬつもりは無い」と誰かが言った時、文脈によっては、『努力をしても無駄になるだけだから、最初から諦める。』という意味もある。ブラジル人気質を巧く表している。果たして、ジルマ大統領にそのオプションは無かったのか？

村田俊典（ブラジル日本商工会議所 会頭）



●特集●ブラジルの世界遺産

ブラジルの世界遺産 (文化遺産)



麻生雅人

(『Mega Brasil』編集長)

ブラジルの文化遺産とは

ブラジルには、ユネスコの世界遺産リストに、文化遺産として登録された遺跡が12ある。これらの文化遺産を巡るだけでも、この国に、実に多様な文化が混在していることを実感することができる。まずは、遺跡のリストを記しておこう。

- 古都オウロプレット (1980年登録、南東部ミナスジェライス (MG) 州)
- オリンダ歴史地区 (1982年登録、北東部ペルナンブーコ (PE) 州)
- サンミゲル・ダス・ミッソンエス遺跡群 (1983年登録、南部リオグランデ・ド・スール州。1984年、「グアラニーのイエズス会伝道施設群」にアルゼンチンとまたがる編入)
- サルヴァドール・ダ・バイア歴史

地区 (1985年登録、北東部バイア (BA) 州)

- ボン・ジェズ・デ・コンゴニャスの聖所 (1985年登録、南東部 MG 州)
- ブラジリア (1987年登録、連邦直轄区 (DF))
- セーハ・ダ・カピヴァラ国立公園 (1991年登録、北東部ピアウイ (PI) 州)
- サンルイス歴史地区 (1997年登録、北東部マラニョン (MA) 州)
- ジアマンチーナ歴史地区 (1999年登録、南東部 MG 州)
- ゴイアス歴史地区 (2001年登録、中西部ゴイアス (GO) 州)
- サンクリストヴァンの町のサンフランシスコ広場 (2010年登録、北東部セルジッペ (SE) 州)
- リオデジャネイロ：山と海の間のカリオカの景観 (2012年登録、南東部リオデジャネイロ (RJ) 州)

植民地ブラジルにおけるカトリック宗教芸術

ここでは、植民地時代のキリスト教に關係する建築やアートを軸に、この遺跡のリストを眺めていこうと思う。

ブラジルに現存するキリスト教関連の宗教建築では、16世紀末に作られたものが最も古いとされている。

この当時からイエズス会が、長持ちする材料を使って建物を作り始めたという。イエズス会はコレジオ (学校) を作りセミナリオを行い、カペラ (チャペル) の周辺に聖職者や学生の住居、パチオ (石畳の広場) を作った。こうしたカペラは、オリンダやサルヴァドールでもみられる。

各地に作られたお堂のようなカペラ (チャペル) の中には、鐘つき堂が付け加えられたり、次第に小聖堂 (カペラモール) や教会へと発展していったものもある。古いカペラではオウロプレットのパードレ・ファリア、ユネスコのリスト外だが MG 州サバラー市のノッサ・セニョーラ・ド・オーが名高い。

教会建築も、時代や、建てられた場所によって建築様式やデザインがだいぶ異なる。植民地時代のブラジルでは、16世紀から18世紀にかけて大きく3つの建築様式がポルトガル人によって伝えられている。17世紀の建築に多く見られるのがマヌエリスム (マヌエル様式) で、その後、バロックとロココが伝わった。ただしブラジルの場合、ひとつの建造物にバロック様式とロココ様式とが同時に取り入れ



オリンダ。教会壁面のタイル。タイルはマネリスモ様式では長方形で使われていたが、18世紀前半以降は描かれるテーマも広がり、絵にもカペセイラとよばれる装飾図版が取り入れられるようになった



サンフランシスコ・デ・アシス教会（オウロプレット）。アレイジャジーニョが手掛けた教会のひとつ。外側を手掛けたのちに内装を手掛け約 20 年かけて作られた。内装は彫刻や絵画で飾られた。輸送するのが困難だったこともあり、沿岸の都市の教会で多く使われたタイルは MG 州のロココ様式の教会ではほとんど使われなかった

られているものも少なくない。

基本的にブラジルに伝わったマヌエリスムは、イタリアのオリジナルスタイルというよりはポルトガル流に変化したものと考えていいだろう。教会内のスペースは長方形が基本。装飾には植物の図章がふんだんにつかわれていることが多い。1657～1692 年の間にサルヴァドールでイエズス会が建てた教会は、身廊や装飾にマヌエリスム様式が使われている。

バロック様式の教会は文化遺産の指定地域でも多くみることができる。内部の壁面は、金銀などを使ってほとんど装飾が施され、木材を使った面にも金箔が使われた豪華さが特徴。天井に至るまで壁という壁が装飾で埋められた。この豪華さは権力を誇示する目的や、何より信者を圧倒するためのものだったという。

歴史学者のミリアン・アンドラーデ・ヒベイロ・デ・オリヴェイラは、バロックの時代、劇場の構造が教会に影響を与えていると指摘している。身廊から祭壇に向かって壁面に聖人像が並ぶスタイルは、客席から舞台に向かって両

脇に横敷席のある劇場に似ているという。

天井画もバロック様式のデコレーションでは名高いものが多い。サルヴァドールのコンセイサウン・ダ・ブライア教会にはジョゼー・ジョアキン・ダ・ローシャの絵が残る。

またバロック時代の教会は、中は絢爛豪華だが教会の外壁は、正面以外はいたってシンプル。そのコントラストを強調していたようだ。

サルヴァドールのオルデン・テルセイラ・デ・サンフランシスコ教会では正面に豪華な飾りつけが施されている。

アズレージョ（ポルトガル産タイル）の展開

17 世紀末ごろから、教会内の壁面の下方部にタイルを使う様式がポルトガルから伝わる。バロック様式の教会は自然光を積極的に取り込む構造ではなかったため、白と青のタイルによる光の照り返しで教会内の十字架を明るく見せる効果があったという。このスタイルはオリンダの隣町レシーフェのカペラ・ドウラダや、サルヴァドールのサンタ・カーザ・ダ・ミゼリコルジアなどでみられる。

これらのタイルは装飾画と同じように聖書のお話や道徳的なテーマなどを絵で見せる役割も持つようになっていく。タイルはポルトガルから輸入されたもので、フランススコ会が建てた教会に多く使われていたという。

1730 年代ごろからフランスではやり始めたロココ様式は大げさなバロックへの反発から浸透していった。この様式の教会は 1753 年にリオデジャネイロに上陸して以来、各地で 18 世紀から 19 世紀初頭に多く作られている。長方形を基本としたそれまでの建築と大きく異なるのは曲線が多用され、中

には、内装を広く見せるため壁も丸くした教会もある。

窓も大きく自然光を取り入れて教会内を明るくした。バロックでは装飾の題材も雰囲気を含め悲観的だったが、ロココでは全体的に楽観主義の雰囲気が取り込まれていく。内装の壁面も基本白色（もしくは何かしらの淡い色）で、ところどころ金色の装飾がほどこされる、というスタイルへとがらりと変わる。

このロココ様式の教会の宝庫が MG 州。1768 年にサントアリオ・デ・コンゴニャスが取り入れたほか、有名なアレイジャジーニョがロココ様式を取り入れた。オウロプレットのサンフランシスコ・デ・アシス教会もこの時代の代表的な教会のひとつだ。コンゴニャスの聖堂の装飾はアレイジャジーニョならではのロココ彫刻のひとつだ。

ロココ様式は規則が厳密でないこともあり、バロック様式を受け継ぎながらロココ様式が共存するものもあるし、沿岸地方と MG 州とでは様子が異なるなど各地でかなりの違いがみられる。ユネスコのリストにはないリオの教会と比べてみるのも、楽しい。



ノッサ・セニョーラ・ド・ホザーリオ・ドス・プレトス教会（オウロプレット）。ロココ様式を取り入れ曲線が強調されている。同教会をはじめ、特にイルマンダージ（民衆信徒組織）の間でこうしたスタイルの教会が広がったという



●特集●ブラジルの世界遺産

ブラジルの世界遺産の分類学



桜井 悌司
(当協会常務理事)

日本人ほど世界遺産大好き人間の多い国は珍しい。テレビを見れば、必ずどこかのチャンネルで取り上げている。地域振興のため、官民挙げて世界遺産の候補を必死で探している。日本には世界でも類を見ない「世界遺産検定」なるものが存在する。NPO法人世界遺産アカデミーが主催し、就活やアルバイトで有名な(株)マイナビが運営している。2006年に開始され、1級から4級までに分かれており、平成27年には、約2万7,000人が受験した。現在までに、累計12万人超が受験、認定者は6万人以上という。

世界遺産というと知っているようで知らないことが多い。以下簡単におさらいしてみよう『世界遺産条約』は正式には「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」といい、1972年のユネスコ総

会で採択され、1975年に発効した。現在191か国が加盟している。ちなみに日本の加盟は、1992年とブームの割にはずいぶん遅く、125番目である。世界遺産は、「文化遺産」、「自然遺産」、「複合遺産」の3つに分かれているが、2015年現在、文化遺産802(全体の78%)、自然遺産197(19%)、複合遺産(3%)32の合計1031か所となっている。毎年、ユネスコ総会に新規の候補が提案されるので年々増加することになる。

遺産登録数の上位ベスト10の国をあげると、①イタリア51 ②中国48 ③スペイン44 ④フランス41 ⑤ドイツ40 ⑥メキシコ33 ⑦インド32 ⑧英国29 ⑨ロシア26 ⑩米国23となっている。これに続くのが、日本やブラジルの19であり、第11位を占める。

中南米でのランキングを見ると、1位がメキシコ、2位がブラジル、3位がマチュピチュやナスカで有名なペルーで12、4位がアルゼンチンとキューバでそれぞれ9となっている。

ブラジルに焦点をあわせよう。ブラジルは1977年にいち早く条約に加盟し、現在、文化遺産12、自然遺産7の合計19を数える。どんなものがあるのだろうか。リストアップすると別表のようになる。(カッコ内は採択された年)

ブラジルの世界遺産の特徴と分類

文化遺産と自然遺産がバランスよく存在する。一般的には、文化遺産が全体の78%を占めるが、ブラジルの場合は、12対7となっている。文化遺産は、比較的訪問しやすいが、自然遺産となると都会から遠く離れているので容易には行けないところが多い。以下、文化遺産と自然遺産を筆者の独断と偏見で分類してみよう。

文化遺産の分類と特徴

- 1) 歴史的建造物の無い新しい世界遺産＝ブラジリア(1960年にリオから遷都。ルシオ・コスタとオスカー・ニーマイヤーの設計で有名)
- 2) 全体の景観の世界遺産＝リオデジャネイロ(1763年からブラジリアの遷都までブラジルの首都、世界遺産の対象は、コルコヴァードの丘やコパカバーナ海岸等の景観で、知名度は極めて高い)
- 3) 首都の遺産＝サルヴァドール(1763年にリオに遷都されるまでブラジルの首都、堂々とした教会建築が多い。カーニバル、カポエイラ、カンドンプレで有名)



バンタナルでふんだんに見られるワニ(写真も筆者、以下同じ)



サルヴァドールのペロウリーニョ広場

4) 鉱産物に関係した文化遺産＝オウロ・プレト（黒い金という意味、ゴールドラッシュで栄えた町、ゴシック建築が多い）、ジアマンチーナ（名前の通りダイヤモンドの産出地）、ゴイアス（ゴイアス州の元州都、金で栄えた）

5) キリスト教の布教に関連した遺産＝グアラニーのイエズス会伝道所群（アルゼンチン、ブラジルにまたがる伝道所群、映画「ミッション」で有名）、ボン・ジェズ・デ・コンゴニャスの聖所（天才建築家・彫刻家であるアレイジャジーニョのバロック様式の建築で有名）

6) ポルトガル以外の外国も関連する遺産＝サンルイス歴史地区（フランス人によって建設された都市、「タイルの町」として有名）、サン・クリストヴァン（セルジッペ州の元州都）の町とサンフランシスコ広場（17世紀オランダによって一部破壊され、ポルトガルによって改修された）、オリンダ（オランダに破壊されたがポルトガルによって再建された。ポルトガル語で「何と美しい」という意味）

7) 旧石器時代の線刻岩絵群や洞窟壁画の文化遺産＝セーハ・ダ・カピヴァラ国立公園

「自然遺産」の7つを2つに分類してみよう

1) 誰もが知っている自然遺産＝イグアス国立公園（世界最大の瀑布、アルゼンチンと接する）、パンタナル自然保護地域（本州くらいの面積を持つ大湿地地帯、カピバラ、ワニ、鳥類をふんだんに見ることができる）、中央アマゾン保全地域、フェルナンド・デ・ノローニャ島等（最近テレビでたびたび）取り上げられている白い砂で有名）

2) 広大な面積を持つ保護地域・保護区＝セラード保護地域、大西洋岸森林南東部の保護区群、コスタ・ド・デスコプリメントの大西洋岸森林保護区群（いずれも広範な面積にわたるのでどこに行けばいいのかわからないのが難点）

ブラジル訪問外国人観光客数は、2014年には643万人であった。サッカーのワールドカップの影響で対前年比10.6%の伸びを示した。ブラジルを訪れる外国人のランキングは、1位がアルゼンチン人174万人、2位が米国人

66万人、3位がチリ人34万人となっている。中南米の外国人観光客受け入れ国のベスト5は、メキシコが29.1百万人、2位がブラジル6.4百万人、3位がアルゼンチン5.9百万人、4位がドミニカ共和国で5.1百万人、5位がチリで3.6百万人となっている。ブラジルはこれほど魅力にあふれた世界遺産を持っている割には、外国人観光客の数は少ない。ブラジル政府にはもっと知恵を出してもらいたいものだ。



イグアスの滝の悪魔の喉笛



アマゾンのジャングルロッジ

「文化遺産リスト」

- 1) オウロ・プレト歴史地区（1980年）
- 2) オリンダ歴史地区（1982年）
- 3) セーハ・ダ・カピヴァラ国立公園
- 4) グアラニーのイエズス会伝道所群（1983/1984年）
- 5) サルヴァドール・ダ・バイア歴史地区（1985年）
- 6) ボン・ジェズ・デ・コンゴニャスの聖所（1985年）
- 7) ブラジリア（1987年）
- 8) サンルイス歴史地区（1997年）
- 9) ディアマンティーナ歴史地区（1999年）
- 10) ゴイアス歴史地区（2001年）
- 11) サン・クリストヴァンの町のサンフランシスコ広場（2010年）
- 12) リオ・デ・ジャネイロ：

山と海と間のカリオカ景観群（2012年）

「自然遺産リスト」

- 1) イグアス国立公園（1986年）
- 2) 大西洋岸森林南東部の保護区群（1999年）
- 3) コスタ・ド・デスコプリメントの大西洋岸森林保護区群（1999年）
- 4) パンタナル自然保護地域（2000年）
- 5) 中央アマゾン保全地域群（2000年）
- 6) ブラジルの大西洋上の島々：フェルナンド・デ・ノローニャとロカス環礁の保護区群（2001年）
- 7) セラード保護地域：ヴェアデイロス平原国立公園とエマス国立公園（2001年）



世界遺産セーハ・ダ・カピヴァーラ遺跡 と先住インディオ起源論争

『ブラジル特報』編集部

先住民インディオの起源はいつだろうか。世界の考古学界で定説とされるのは、約2万年前の氷河期の最寒期に、ベーリング海峡が凍結して陸続きになっていたため、アジアからアメリカ大陸へ移動した、というものだ。地質編年、放射性炭素法などの科学的データが揃っていて、多くの研究者が「米大陸で最古の遺跡の一つ」と認定しているのが、北米ペンシルバニア州メドークロフト遺跡で、ここは1万9千年前と発表されている。米国以外では、カナダやチリでも2万年前から3万年前と鑑定された石器や骨角器が発掘されていたが、1980年代の先住民の起源年代に関する“常識”は1万9千年～2万年前、というものであった。

ところが、1988年、なんともポレミクな論文が発表される。

ピアウイ州サンハイムンド・ド・ノナト市セーハ・ダ・カピヴァーラ遺跡を10年以上に亘って調査した結果、先住民が残した崖壁画については9千年前であることが確認されたが、洞窟内で発掘された、人間による火の使用痕とみられる複数の炭化物を放射性炭素法で測定したところ、発見された地層毎に5千年前、1万7千年前、3万2千年前、4万1千年前という数値が確認された。従って、4万年前から人類が同遺跡地区に住んでいたことが科学的に証明された、というのがその論文の主旨であった。

その論文の著者はニエジ・ギドン博士(1933～)、当時カンピーナス大学教授だったが、パリ大学で考古学博士号を修得しているので、フランス考古学派といえる女性学者だ。

ここから、ハチの巣をつついたような論争が勃発することになる。

アメリカ大陸における人類の起源についての全ての理論を打ち壊すものだ、と評価

する学者も出てくるが、大半は全否定派だった。いわく、炭化物の年代測定が出来たとしても、それは先史人の時代を証明することにはならない。なぜなら、山火事や雷のような自然発火が引き起こした炭化現象である可能性が高いからだ、と。

「もし、その炭化物にごくわずかでも汚れが付着していたら、どんな一流の研究所がやったとしても正確な年代鑑定はできない」と言い放ったのが、ベッティ・メガース教授(1921-2012、スミソニアン研究所)であった。邦訳書『アマゾニア―偽りの楽園における人間と文化』(教養文庫)もあるため日本での知名度も高く、マラジョ島土器文化の研究で博士号をとり、南北アメリカ、なかんずくブラジルの若手考古学者を育成した実績もあるメガース教授としては、メンツにかけても全面否定しなかったのだろう。(ちなみに2012年に彼女が亡くなった時、フォリャ・デ・サンパウロ紙は「アマゾン考古学の母、死す」と報じていた。)

これに対し、ギドン教授は、「旧説墨守だ、新たな科学的発見を認めないのは感情的反発にすぎない」と徹底反論し、この論争は、一般紙誌(フォリャ・デ・サンパウロ紙、ナショナルジオグラフィック誌など)やTVでも何回も大きく取り上げられることとなった。筆者のような野次馬には、科学的論争というよりも、著名な女性学者同士のケンカとして観客席から高みの見物という感じであったし、さらには米考古学派とフランス考古学派とのあいだの深まるばかりの溝が影響したとみ

る向きもあった。

さて、論争勃発から30年近く経過したが、その後の発掘で見つかった更に多くの遺物がフランスやオーストラリアで科学鑑定された結果、年代については5万年前から5万5千年前まで遡ることになり、最近では、ギドン博士は、「恐らく5万年前、アジアからでなくアフリカから舟に乗ってアメリカ大陸に最初の人類が到達したと思われる」と発表している。一方、米考古学の主流は、相変わらず、ギドン説を認めていない。

素人判断ではあるが、先史人の骨、石器、炭化物の三位一体が同じ地層から共伴した状態で発掘・発見されない限り、この論争は決着がつかないだろうと思われる。

とまれ、この考古学論争地が世界遺産(文化遺産)として認定されたのは1991年のことであった。考古学界全般での意見合意はいまだになされていないが、ユネスコは、この考古学遺跡の文化的重要性を認知したわけであるから、その意味ではギドン博士説が実質的に評価されたということになる。

かつて「神の手」と称された人物が石器を捏造したことで日本の旧石器時代論争は科学的信用を喪失してしまったが、ブラジルを舞台とする考古学論争は、少なくとも同国の政治ほどは混迷していない。とはいえ、今後の展開が気になるところだ。



テメル政権はブラジルをどう変えようというのか



岸本憲明

2016年5月12日、上院本会議の票決によってジルマ・ルセフ大統領（PT＝労働者党）の弾劾法廷設置と最長180日の職務停止が決まり、3月にPTとの連立を解消したPMDB（民主運動党）のミシェル・テメル副大統領が代行に就任、暫定政権が発足した。

暫定政権は何を目指すのか、そしてそれは実現できるのか。結論的に言えば、現時点では、目指す方向性は明確だが、それを遂行する政権の力量は未知数というところであろう。

テメル政権の目指す方向

ブラジル経済はインフレが高止まりしたまま、実質GDPはこの第1四半期まで5四半期連続で前期比マイナス成長を記録した。財政赤字も記録的な水準に達する。経済の再生が最大かつ喫緊の課題である。テメル暫定政権はどこに出口を求めるのか。大きな柱は、次の三点に集約できる。それは保護主義に閉じこもり拡張的財政政策と経済への政府干渉を旨としたルセフ時代からの抜本的な路線転換を意味する。

(1) 経済への国家介入を減らし民間投資を再活性化すること

ペトロブラスも開発銀行（BNDES）も、ダウンサイジングと役割の再定義等、大きなリストラを断行する。サンパウロのコンサルタント会社の試算によれば、2015年のGDP成長率▲3.8%のうち、2%ポイントはペトロブラスとそのサプライヤーのスキャンダル効果。ブラジル経済における同社のウェイトがいかに大きいかを示すもので、改革の規模・方向は民間参入の行方とマクロ経済に多大な影響を及ぼす。大きな財政負担の一因となっていると

ともに民間金融をクラウドアウトしているBNDESも対象だ。

ただし、暫定政権の経済政策で重要な役割を期待される民間セクター側も、信用収縮が進むなかで債務負担から破産申請が急増、多くの企業が資産売却に奔走中という体力的な問題を抱えている点、留意を要する。

(2) 財政健全化・政府債務削減への道筋をつけること

伝統的に「大きな政府」のDNAを持つ国であるが、ルセフ政権5年間で拡張的政策は加速し、財政赤字はGDP比10%まで膨張した。ブラジルの政府支出の8-9割は義務的支出、裁量的支出は1-2割である。従来の財政調整は裁量的支出をどれだけ削るかに留まっていたが、新政権は義務的支出の改革に取り組みもうとしている。すなわち、歳出の伸びを前年インフレ率以下に抑え（実質伸び率をゼロ%以下にする）、社会保障制度、とくに年金を根本的に見直すことを最優先課題に挙げている（ラミ平均と比べても低い年金受給開始年齢の引き上げ、支給年金の最低賃金スライドの見直し等々）。これらの改革は上下両院で3/5の賛成を要する憲法改正を伴う。

88年憲法が国民の経済的諸権利を事細かく盛り込んだことが後々、財政の硬直化に繋がったことを踏まえ、パッチワークのような一回限りの支出削減ではなく、PT政権では望みえなかったこれら「聖域」に踏み込み、永続的に支出の仕組みを変更することを目指す。

(3) グローバルなサプライチェーンにブラジルを組み込んでいくこと

外国との通商戦略は開発商工省ではなく、外務省が担う。セーハ外相はイ

デオロギーに重きをおいたPT政権時代の第三世界外交から経済的国益・実利を軸とした外交への転換を宣言。非伝統的輸出拡大に向けた野心的な施策を練る。さらにメルコスル加盟国が個別に域外国とFTA交渉を行えるようルール弾力化を目指すとしている。

新しい経済の方向は実現可能か

実行に移すための最初のハードルは8月に予定されている弾劾裁判の結審で大統領を罷免に持ち込むこと。弾劾および暫定政権の正統性への攻撃に鎮静化の兆しが見えないなかで「痛みを伴う政策」を掲げながら国民からの認知を高めていけるかが暫定政権の成功のカギとなろう。

シナリオとしては①弾劾裁判でルセフが逆転勝利②世論調査が圧倒的に支持する年内の大統領再選挙③ルセフの罷免で「暫定」が取れたテメル政権が2018年まで務める、などがありうるが、①と②は、可能性としては残るものの確率は低い。大方の見方は③である。③で結審すれば、PT側の抵抗は残存するものの、政治的な不透明感はかなり払拭されよう。

民政移管後の30年で、副大統領から大統領の任期途中で昇格した大統領はテメルで3人目である。1992年、副大統領から昇格したイタマル・フランコは残存任期2年の間にF. H. カルドーゾを蔵相に据え、レアル計画によってハイパーインフレ終息に劇的な成果を挙げた。テメル暫定大統領とメイレス蔵相は今、それと同じ境遇にあるとも考えられ、経済再生劇の再現が切に望まれる。

日系社会の実態が知りたい！

細川多美子

(サンパウロ人文科学研究所
常任理事)

ブラジルの日系社会が「消えてゆく運命」と言われるのは、今に始まった話ではない。半世紀も昔に「移民 100 周年の担い手は（非日系の）ブラジル人の手に渡っている」と予想した知識人がいたそうだが、残念ながらというか、喜ばしいことというか、その見通しははずれてくれた。

日本に外国人労働者が増え、国際結婚が増え、いつか日本に純粋日本人がいなくなるのではないかと、私でさえ言ってしまうのと同じように、ブラジルの日系社会が消えていく、というのは、運命として語るほどの大層な予想ではないように思える。

時代を経て移民オリジナル一世が減り、二世、三世が他民族と混血し、日系コロニアと呼ばれたものが変質していく。その変容に愁いがこもると「消えていく」と言いたくなるのだが、サンパウロの邦字新聞が 2 社とも生き残っている底力にも見られるように、日系社会は意外な生命力を蓄えて生き抜いている。サンパウロのような大都市では多様な価値観に埋もれて見えにくいものが、地方を訪ねてみるとよくわかる。移民社会において、「日本人は 3 人集まると会を結成する」という調子で、日本人移民の入ったところ隅々に日本人会ができた。互助会や日本語学校、野球チームなどで集まった会は、時代に合わせて「文化協会」的な会館としての役割に変化した。生まれたり消えたり、復活したり統合されたりしながら、現在も活動をしている日系団体は、ブラジル全国で実に 450 前後存在している。絶滅危惧種にしてはたくましい数字ともいえるだろう。

いまやポルトガル語化した地域すらあるこれら“KAIKAN”が、毎年運動会を行い、盆踊りをブラジル人に教え、ヤキソバを一日に 2000 食も作り、もちつきをして新年を迎える。2008 年の移民 100 周年以降は「日本祭り」に準ずるイベン

トを行う団体が増え、収入源を確保しつつ年々規模を拡大している。そういう現場ではもはや日本語が使われることはほとんどないが、Keiro-kai という名の敬老会を 50 年も 60 年も伝え続けている日本的現実、感動的ですからある。

日系社会は、当初予想していたものとは姿を違えながらも存続しているのであって、想像外であるために実情がわかりにくい。そのために実際にはあるものが、なきものにされようとするなら、今その実態を押さえておかなければ、不明と誤解と損失で終わってしまうかもしれない。今回、移民研究を続けて来たサンパウロ人文科学研究所を中心に「多文化社会ブラジルにおける日系コミュニティの実態調査（上記約 450 団体すべてをフィールド調査）」を行うことにしたのは、そんな日系社会が自分たちの現状を認識することが、日系社会の活性化のみならず、ブラジルの地域社会へも少なからず影響を及ぼすと考えたからだ。

私個人としては 100 近くの団体を訪れているなかで、おぼろげながらその存在意義も見えてきた。サンパウロ州内陸の小さな町における KAIKAN は、地域唯一の文化施設であることが多い。と同時に、農産物の特産品を冠にしたイベント（ブドウ祭り、柿祭り、ショウガ祭り等）や、今ひそかに人気上昇中の盆踊り、日本祭りなどが、その町最大のイベントであることも多く、ブラジル人たちが数千人単位で集まる。ヤキソバやスシなど和食の発信源になっていることは間違いない。地元議員との関係も深くなり、市との共催などで公式行事として資金援助を受ける場合も多い。市からの評価としては、施設をきれいに返してくれる、物がなくならない、約束事が守られる、時間に忠実、イベントにつきものの喧嘩やドラッグがない、など他愛ないといえ他愛ないが好評だ。これを運営する日系団体にかかわる人たちのほぼ 100% がボランティアとして活動している。こんな組織を全国に 400 以上も持つのは他人種には見当たらない。また他の国にも類がない。ブラジル社会から求められているともいえる活動であり、もはや日本文化の担い手は、日系だけではないといえることができる。

例えば日系人と結婚し日系コミュニティでヤキソバを作るブラジル人は日系社会の一員かそうでないか。当然「日系」の定義もゆらいでくるのであり、いろんな条件が加わった今、消えるものではなく、残っていくものにも注目したいと思っている。幻想の「古き良き日本」ではなく、ブラジル社会との共存から生まれた、ブラジルの磨かれた日本性を探っていく中で、日本人ってこんな人たちだったんだなあ、ということが改めて見えてくる気がする。



日本ハムグループ ブラジル市場への再挑戦



西裏昌弘
(NH フーズ・ブラジル有限会社
代表取締役社長)

世界で一番の「食べる喜び」を提供する会社を目指して食肉加工からスタートした日本ハムグループは、日本で1942年に設立され、企業史の中でその事業を食肉から始め、加工食品・水産物・乳製品・健康食品などあらゆる食品分野へと広がってきた。

海外事業への進出は、1977年の米国・78年の豪州を皮切りに現在、18カ国33社に広がっている。

■ブラジルでの日本ハムの歴史

日本ハムグループとして、1989年に「ブラジル日本ハム」を現地法人としてサンパウロに設立している。それから18年間、主に畜産品の日本向け輸出拠点として業務を行っていたが、それ以外の新しい商売を生み出せなかった事、また当時ブラジル大手食品企業のSADIA/PERDIGAO（のちに両社が合併してBRFとなる）/SEARA（現JBS）が相次いで日本に営業拠点を設立した事で、ブラジルにおける畜産品の窓口業務が激減した事などを受け、2007年に閉鎖された。

しかしながら、閉鎖後もブラジルの畜産大国としての重要性は揺るがず、むしろ、第二次ルーラ政権下でインフレ・為替リスクが大幅に後退した当時のブラジルは存在感を増していった。また、畜産業界では当時大手企業（BRF/JBS）による中小パッカーの買収が相次ぎ、業界再編が進んだ事で、結果として情報の一極化を招き、ブラジルから日本へ輸入される畜産品は、より一層相場の影響を受けるコモディティ商品化していった。

ブラジルの国際市場における存在感の増大は、社内にブラジル市場における自社商品販売の可能性を感じさせ、情報の一極化は、現地からの客観的かつ多様性のある情報の必要性を認識させる事となった。同時に日本ハムグループとして、売上の9割が日本市場、という現状から、国際企業への進化を目指す機運が高まっていた。

こうした状況の変化を受け、閉鎖から7年が経過したブラジルにおいて、2014年4月、英語社名が「Nippon Meat Packers」から「NH Foods」へと変更された事を受け、「NH Foods do Brasil」として、日本ハムのブラジル現地法人として事業の再スタートを切ることとなった。

■ブラジルでの再スタート

ブラジルでは近年、大きな中間消費者層が誕生している。従来ブラジル人の食生活にありがちだった大きな肉塊を購入し、数日間は肉ばかりを食べるというものから毎日スーパーに通って、日々食べたいものを日替わりで少しずつ購入するライフスタイルに変化しつつある。それを証明するように、サンパウロ市内地ではミニスーパーと呼ばれる小型のスーパーマーケットや、HIROTA expressのような、まさに日本のコンビニ店舗を意識した小型店舗も誕生している。

こうした新しい市場に対して、日本ハムとして、今まで培った食品加工技術を、ブラジルの食文化に適合させた上で、マーケットに新しい選択肢を生み出したいと考えている。

■スポーツを通じた社会貢献

日本ハムの企業風土の一つに、野球やサッカーを通しての社会貢献がある。「食とスポーツで健康を育てよう。」をテーマにスポーツを通じて人々が触れ合う交流の場を作り、人と人の心がつながるコミュニケーションづくりに取り組んでいる。野球では「北海道日本ハムファイターズ」の運営、サッカーでは「セレッソ大阪」の共同運営を行っており、その他にも市内マラソンや野球教室の開催など、これらの活動を通してスポーツの底辺拡大と青少年の健全育成を支援している。こうした日本での活動で得た知識を基に、今後はブラジルでもスポーツを通じた社会貢献に取り組んでいきたい。

■ブラジル事業への想い

今回縁があって、ブラジルでの新会社立ち上げを任される事になった。輸入鶏肉を販売する部署に所属していた事から、ブラジルとの接点は持ち続けており、ブラジルへの再進出を進言し続けていた為、「そこまで言うのなら自分でやってみよう」と指名されたと認識している。日本ハムは13の事業を持ち、扱い食品也多岐にわたる。この中からどの商品がブラジルの食文化を豊かにする事が出来るのか、どの事業がブラジルの消費者に「食べる喜び」を提供する事が出来るのか、現在トライ＆エラーを繰り返しながら検証を行っている。

設立者として、会社員としての残りの25年間ですべてブラジルに捧げ、“brasileiro da gema”として、事業の発展に貢献したいと考えている。

ブラジルの知財政策とわが国との関わり



松田純一
(弁護士。松田総合
法律事務所所長)

本年4月、知財分野ではブラジル有数の法律事務所であるGusmão & Labrunieのパートナー2名が訪日し、東京と大阪で政治経済と知財についてセミナーを開催した。東京会場は日本ブラジル中央協会と当事務所が共催し、幸い70名以上の方にご参加頂いた。今回は知財の重要性とブラジルの知財政策をご紹介します、併せて日本との関係を考察したい。

なぜ知財戦略が必要なのか

優れた技術は競争力の源泉であるが、製品としての「付加価値」が重要であり、企業の事業戦略に沿った知財戦略が必要となる。また、大企業が進出しない「ニッチ市場」と参入障壁が低く競合先の多い「巨大市場」では求められる知財戦略が異なるであろう。特許取得の意義を「市場への有利な参入」、「差別化によるシェアと利益の拡大」とすれば、経営戦略に沿った知財戦略はビジネスを有利に展開する鍵となる。大企業に比較し資金・人材での制約の多い中小企業においては知財戦略の重要性がより高くなるだろう。

なお、技術の先端をゆく製品は複数の特許で守られている場合が多いが、何が何でも特許を取得して技術の囲い込みをするのではなく、自社の周辺技術を敢えてオープンにし、足りない技術は外部導入により補い競争力を高めていく方法や、ノウハウとして秘匿する方法もある。

ブラジルの知財政策

ブラジルはパリ条約の同盟国、世界知的所有権機関の加盟国であり、産業財産権法により特許（発明特許、実用新案）、意匠、商標に関する保護が規定されており、これらと地理的表示、技術移転およびフランチャイズに関わる契約は国立産業財産庁（INPI）へ登録する必要がある。ロイヤルティーの国外送金はINPIへの登録後、中央銀行（BACEN）への登録も必要である。なお、遺伝子組み換え生物、ソフトウェア、プログラム、外科手術・治療診断方法等は特許の保護対象となっていない。

同国知財制度の概要は日本や欧州の制度と類似しているが商標の国際登録を簡素化するマドリッド協定の議定

書（2016年3月現在、97カ国加盟）には加盟していない。従い、複数国に於ける権利取得手続きの簡素化や各国毎の登録料支払いが不要となるメリットを享受できない。商標の出願審査未処理分（バックログ）が膨大なため、出願から登録完了まで通常5年超という問題が同協定の批准を妨げる大きな理由とされる。一方、ブラジル特許商標庁も手をこまねているわけではなく、①ITへの投資②出願および特許・意匠審査の電子化等のシナリオがある。更に特許出願の審査迅速化を進める新たな措置として、①特許出願に係る発明の主題が模倣されている場合②環境関連の場合③財源確保が必要な場合④出願者がブラジルの零細・小企業に該当する場合等には優先審査を申請できる制度が導入されている。

ブラジルの強みと日本の関わり方

日本企業では自動車および周辺産業、家電、鉄鋼、化学等を中心に、近年、特許・意匠・商標が出願されている。日本の案件数はブラジルを除く外国群では、特許：3番目、意匠：2番目、商標：7番目となっており、INPIによると、2014年12月までに日本の出願案件の内2,972件が登録を受けている。一方、両国の知財政策での相互協力は未だ十分とはいえず、今後は補完関係を強めることを提案したい。

ブラジルは農畜産大国のイメージが先行するが、ガソリン代替としてのエタノール車やガソリンと混合出来るフレックス燃料車、エンブラエル社製リージョナル旅客機に代表される先端技術を有する。石油代替としての「エネルギー技術」や「環境保護技術」の分野で世界的にも特徴のある技術と経験のある日伯両国が協調すれば、更なる技術向上につながる可能性が高いだけでなく、知財政策に於いても国際的なリーダーシップが取れると期待する。ブラジルが歴史的に高い競争力を誇る農畜産業では、遺伝子、バイオの他、高機能で健康被害のない肥料等も重要な品目であろうし、将来は医療（医薬品、医療機器）もその重要性を増すに違いない。また、ブラジルは人口2億人の市場としての魅力だけでなく、近隣南米諸国市場へのハブとしても活用できるため、両国協調により期待できる成果は非常に大きいと考える。

非居住者に対する キャピタルゲイン課税



加藤雅規
(PwC税理士法人パートナー)



マルコ・クアドロス
(同ディレクター)

ブラジルへの投資の売却・撤退を検討している海外の投資家には、非居住者に生じる最終的なキャピタルゲインに対して、ブラジルで課税されると聞くと、驚きかもしれない。本寄稿は、ブラジル税務当局により最近導入された新しい変更点について注目し、当該規制についてのガイダンスを提供することを目的としている。

取得原価の証明

まず、一番大事な点として、海外の投資家は、原則として、ブラジルへの投資を処分することによって生じるキャピタルゲインに対して課税される。キャピタルゲインは、取得原価と取引価格の差額に基づいて計算される。ブラジル税法によれば、取得原価は以下により証明することができる

1. 定款、会計帳簿、銀行領収書、個別契約書、会社設立に関する書類等の適切な書類により立証されること；
2. 上記の書類の提示が不可能な場合、投資コストは、ブラジル中央銀行—BACEN に登録された外資資本の金額に基づいて計算されること

しかしながら、取得原価が適切な書類や、BACEN に登録されている外資資本の金額で、裏付けることができない場合、ゼロとみなされることになる。ブラジルのキャピタルゲイン課税は、所得から源泉される形をとり、もし、買い手がブラジルの居住者でない場合は、ブラジルに投資を行っている海外投資家の法的代理人により支払われる義務がある。買い手がブラジルの居住者である場合は、買い手に支払義務がある。

源泉所得税の税率は 15%だが、非居住者がブラックリスト管轄に居住している場合は、25% に増額される。

変更 (提案) 内容は

2015 年 9 月、2015 年暫定措置 692 号を通じて、ブラジルの行政部門は、ブラジルへの直接投資の売却から生じるキャピタルゲインについて、個人と非居住者に適用される新しい税率を提案した。

前述のように、キャピタルゲイン課税は一律 15%、軽課税地域の場合は 25% となっている。しかしながら、2015 年暫定措置 692 号では、次のような累進税率が適用されることになる：

- ① 1 百万レアル以下のキャピタルゲイン部分は、15%；

- ② 1 百万レアル超、5 百万レアル以下のキャピタルゲインについては 20%；

- ③ 5 百万レアル超、20 百万レアル以下のキャピタルゲインについては 25%；及び

- ④ 20 百万レアル超のキャピタルゲイン 30%。

2016 年 3 月にブラジル議会は、2016 年暫定措置 692 号を 2016 年法律第 13,259 号に変更した際、上述の提案の税率を変更した。キャピタルゲインに関する適用税率は、以下のとおりである。

- ① 5 百万レアル以下のキャピタルゲイン 15%；

- ② 5 百万レアル超、10 百万レアル以下のキャピタルゲイン 17.5%；

- ③ 10 百万レアル超、30 百万レアル以下のキャピタルゲイン 20%；及び

- ④ 30 百万レアル超のキャピタルゲイン 22.5%

法律第 13,259 号は、暫定措置 692 号と同様に、タックスヘイブンに居住する法的主体によるキャピタルゲインに、新しい税率がどのように適用されるかについて明確には述べておらず、現状では 25%の税率が適用されている。

法律の本文では、法律が公布される日、2016 年 1 月 1 日から有効になるとしている。法律が 2015 年 12 月 31 日以前の取引によるキャピタルゲインをどのように取り扱うかについて述べていた多くの段落は、最終の本文からは除かれる一方で、その変更により増税となる法律が、2016 年中に有効になるかについては疑問が残る状況である。

税率変更の取引への影響

特に、日本の投資家にとって、日伯の租税条約により、日本の企業は、原則として株式の処分・売却に対してブラジルでキャピタルゲインには課税されない（キャピタルゲイン課税は、日本のみで生じる）が、この変更により、たとえば、米国や英国といったその他の国を通じての投資ストラクチャーに影響があるかもしれない。

そのため、組織再編中あるいは、検討している納税者は、ブラジル投資の売却や取得の際、キャピタルゲイン課税の税率の変更がどのように取引に影響を与えるかについて、考慮する必要がある。さらに、納税者は、2016 年度に税負担増となる取引について、法律の施行に関連する当局の動向に注意する必要がある。

リオ五輪・パラリンピックを前にして



竹田 恒和

(国際オリンピック委員会委員、日本オリンピック委員会会長、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会副会長)

日本にとって2つの意味

いよいよリオデジャネイロ・オリンピックの開会が間近に迫ってきた。この冊子が発行される7月の初旬には、日本選手団の結団式(7月3日)も行われ、各代表選手・役員はリオ大会に向けての本番モードに入っている頃だと思われる。リオ・オリンピック・パラリンピックは日本にとって二つの大きな意味を持っている。

一つは言うまでもなく、次期2020年の(夏季を削除)大会が東京で開催されるということだ。リオは2009年10月にコペンハーゲンで開催されたIOC総会で、マドリード、東京、シカゴを破って南米で初のオリンピック開催を勝ち取った。そして東京はその4年後の2013年9月のブエノスアイレスでのIOC総会で、1964年以来の2回目の開催を決めた。オリンピック・パラリンピックの開催で最も重要なことは、競技施設の充実等あらゆる面で選手の皆さんが活躍できる最高の舞台を提供すること。また、昨今の社会情勢を考えると、世界中から集まってくる、VIP、競技関係者、報道関係者、観客などの安全確保というセキュリティにも最大限の注意を払う必要がある。それに加え、来訪者に“素晴らしいオリンピックだった”という感想を持って帰って頂くための“おもてなし”も重要な要素だ。その意味から、2020東京大会関係者は、リオ大会を経験し、学べることを大いに学んで(次大会を削除)活かしていかなければならない。

二番目は日本とブラジルの長きに渡る友好の歴史だ。「地球上で最も遠い国」とされる日本とブラジルの国交は1895年の修好通商航海条約の調印に始まり、今年で121年目を迎える。1908年には日本からの集団移民が海を渡り、現在では約160万人の日系人が住む世界最大の日系人居住地となっている。

このことに思いを馳せ、大会期間中には、日本選手団をはじめ、関係者などリオを訪れる日本人が現地の日系の方と交

流を深め、両国の更なる理解と友好の促進が図られればうれしい。また、日系3世や4世の方は日本語が話せない方も多くいると聞いているが、この機会に日本選手に声援を送って頂き、日本人として

も開催国ブラジルの選手に拍手を送って応援したいと思う。

日本オリンピック委員会(JOC)では、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会等と大会期間中にリオ市内に“ジャパンハウス”を設置し、日本選手団や東京2020関連の情報の発信、メダリストの会見、更に地元の方たちとの交流を行う準備をしている。現地におられる方、行かれる方には是非ご来場頂きたい。

2020年大会に向けて

JOCは、競技力の向上とオリンピック・ムーブメントの普及を二つの大きな柱として活動している。オリンピック等の国際大会における日本選手の活躍は、国民に大きな夢と希望を与えてくれる。特に次代を担う子どもたちに与える好影響は図りしれないくらい大きいものがある。

リオ大会においても、より多くの日本代表選手が日ごろ鍛えた成果を発揮して、メダル獲得等の好成績を残してくれることを期待している。リオ大会における日本代表選手の活躍は、次回の東京大会に向けて大いに弾みがつくものと言える。一方、ドーピング問題や最近日本で発生した強化指定選手の不祥事等、スポーツ界における負の側面も顕在化している。スポーツ界自らが自浄作用を発揮し、自らの手でこれらの諸問題を解決すべく、JOCとして各競技団体と共に取り組んでいる。

一昨年IOCが発表した、今後のオリンピックムーブメント推進の指針となる40の提言「オリンピック・アジェンダ2020」にも、「クリーンな選手の保護・顕彰」や「オリンピックの価値に基づく教育の普及」などが謳われている。今こそ、スポーツの持つ力やオリンピックの精神などをあらためて見直し、その普及に努めて行かなければならないと考えている。さて、リオ大会の直前に開催されるIOC総会で東京大会で実施される追加競技が決定される。8月21日の閉会式のフラッグハンドオーバーセレモニーでは、リオ市長から東京都知事へのオリンピック旗の引き継ぎがおこなわれる。そしてその後のパラリンピックを経て、いよいよ本格的な東京2020に向けての活動がスタートする。新国立競技場やエンブレム問題では、皆さまにご心配をおかけしたが、新しい競技場の建設の目途もたち、さる4月25日には新エンブレムも発表された。リオ大会終了後は、関係各機関と連携を図り、一層気を引き締めて、最高最良の大会が開催できるよう準備を進めていく覚悟である。



1972年ミュンヘン大会馬術に出場した筆者



私はブラジル日系2世。日伯をつなぐ人材ビジネスの仕事をしている。様々な国の人達と日々接していると思うことがある。個人的見解だが、在日ブラジル日系人は、80年代後半のデカセギブームから現在に至るまで大きく二極化していると言える。いわゆるデカセギ成功者は初期の頃の人達がほとんどで、21世紀以降はリーマンショックや大震災なども影響し、日本経済が低迷、日系人コミュニティも高齢化と縮小が加速している。とはいえ悪い話ばかりではない。現在では日本人社会にとけこみ、活躍する日系人達も現れている。表にはあまり出ていないが、キャリアを積み日本を代表する大手企業で活躍するエンジニアや役員、管理職など重責を担う日系人も増えてきている。

近年日本では働く女性にとっての子育て、とりわけ待機児童の増加が社会問題化しているが、在日外国人女性はある意味日本人より厳しい環境に置かれていると言える。外国籍は保障の範囲が薄く、非正規労働者、シングルマザーであればなおさらのこと。もし子供を保育園に預けられなければ、頼れる実家や家族がいらない彼女達は働きに出る事もできない。ブラジル人の

場合子供と離れて暮らす事はまず考えないが、フィリピン人の場合は、子供を本国の家族や親戚に預けて単身来日、仕事をして仕送りをしたりするケースも多い。

出身国による性格の違いも面白い。ブラジル人はおおらかで何か不都合があれば、「言い訳」をするのが得意。有名な“jeitinho brasileiro” (ブラジル流の处世術) でごまかし上手。ところがフィリピン人の場合は概して警戒心が強く、人を信頼するまで時間がかかるようだ。教会などでグループはできるが、コミュニティは生まれにくい。

在日ペルー人はなぜかブラジル人よりも日本語が堪能な人が多い。そしてコミュニティにあまり依存しない傾向がある。コミュニティはあると便利だが、依存し過ぎると現地にとけこむのに時間がかかるように思う。今まで沢山の在日外国人と接してきて感じるのは、それぞれ文化や考え方が違っても、実は国籍は大して重要ではないという事。日本は今後さらに高齢化が進み、人手不足が深刻になる。日本で働く外国人と子供達を社会全体で温かく受入れてほしい。

ジャーナリストの旅路

身につまされること

ブラジルから伝えられる報道、そして日々目にする日本のニュースで身につまされることが頻繁にある。ブラジル経済の低迷ぶりも気になるのだが、日本の政治や経済は大丈夫だろうか、と感ずることが近ごろ多いのだ。

顕著な例が五輪だ。リオデジャネイロ五輪の開催が決まったのは、自分がサンパウロ支局長としてブラジルに滞在していた2009年のことだ。その当時に書いた記事の中に、五輪招致の前段となったリオデジャネイロでのパンアメリカン大会(2007年)の費用が、当初計画の8.5倍に達したというくだりがある。ブラジル当局の予算コントロールの甘さを指摘したエピソードであるのだが、2020年東京五輪も笑い事はなくなっている。大会全体でも7300億円という当初計画をオーバーすることが避けられそうにない。

ルセフ大統領の職務停止に至った弾劾騒動も、日本から見れば皮肉な出来事だ。「騒動」としたのは弾劾手続きが政争の果てだ、という印象持っているからなのだが、その「具」となったのは財政責任法だ。2000年、過去

檀上 誠

(日本経済新聞社元サンパウロ支局長。94年同社入社。
現在は東京本社編集局ヴェリタス編集部次長)

の野放図な財政への反省から施行された法律で、政府に財政の裏付けを厳しく求めている。今回の弾劾では、ルセフ大統領がこの法の制約を免れるために、国営銀行に支出を「立て替えさせた」という、ジェイチャーニョとも取れる部分も問題にされているようだ。

さて、国債を買い入れた金融機関が粛々とそれを中央銀行に運び、一方では財政再建に必要な増税を延期するという日本と、財政の実態としてどちらが深刻で罪深いのか、考えさせられてしまう。

自分がラテンアメリカ全域を担当した2007～12年は、各国で中間層の厚みが増すという社会構造の変化が指摘され、新興国ブームに沸いた時期だ。ところが今、ブラジルをはじめとしたラ米諸国の経済記事には「資源バブルが崩壊して成長が止まった」といった枕詞が不可分になっている。残念なのはその危機から抜け出す道筋が見えにくいことだ。だがもっと残念なのは、人口減という社会構造の変化、財政の中身もかなり厳しい日本全体で危機感があまり共有されていないことだ。

ブラジル映画新世代を象徴する『ストリート・オーケストラ』

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）



5月21日、カンヌ映画祭のドキュメンタリー部門でブラジル映画『シネマ・ノーヴォ』が部門賞ロエイク・ドールを受賞した、というニュースを聞いて感慨にふけた熟年映画ファンは少なくなっただろう。というのも、この90分のドキュメンタリーは、1950年代末から60年代にかけて世界の映画界を震撼させたシネマ・ノーヴォ運動の史実を画像で振り返りながら詩的にまとめた作品であり、監督エリック・ローシャが、あのグラウベル・ローシャの息子であるからだ。

軍政下でこのシネマ・ノーヴォ運動は窒息させられ、ブラジルの映画産業はその後低迷を続け、1990年前後には“脳死状態”に陥ったが、1994年に制定された映画振興法のおかげもあって、90年代末から「ブラジル映画ルネサンス」と呼ばれるほどの活況を呈するようになる。その主導者の一人が、このシネマ・ノーヴォの精神的DNAを引き継いだヴァルテル・サーレス監督であったが、彼の助監督を務めたセルジオ・マシャードが監督した佳作『ストリート・オーケストラ』が、このほど、8月に日本でも一般公開されることになった。

ということで、6月初旬、試写会に出かけたのだが、試写会会場から表に出た時、まだコーフン状態が続いている、という体験を久しぶりに味わうことになった。簡単な解説を付せば、ファヴェーラ（スラム街）に住む、ラリったり組織犯罪の下っ端で蠢く小悪人の少年少女たちがクラシック楽団にコミットすることで社会矯正していった、という実話に基づく感動的映画である。配給元の宣伝文句をそのまま引用すれば、「ブラジル・サンパウロ最大のスラム街で、子供たちの交響楽団が誕生するまでの感動の実話！」であるが、さほどの外れではない。なにしろ、筆者のような素直な感性など摩滅し切ってしまった者も感動してしまったのだから。

ブラジル社会、特に大都市における格差を象徴するファヴェーラの凄まじい状況への、地域音楽教育を通じた社会包摂運動、の一成功例を映像化した作品である、という評論家的講釈はともかく、ここでは、筆者の私的感想をメモしておくことにしたい。

試写を見終わった筆者が頭の中で思い浮かべた単語が、「和魂洋才」をブラジル風にもじった「バイーア魂サンパウロ才」というものであった。何故バイーア魂か、

それは素晴らしい演技を今回もみせた主演俳優ラザロ・ハモスも監督セルジオ・マシャードもサルヴァドール出身であるからだ。1990年代末からの「ブラジル映画ルネサンス」をリードしたヴァルテル・サーレス監督の『セントラル・ステーション』（1998年）や『ビハンド・ザ・サン』（2002年）に助監督として協働したのがマシャード監督であったが、サーレス監督に彼を紹介したのが、文豪ジョルジ・アマード（1912-2001）であったのだから、まさにバイーア・コネクションのおかげだ。主演のラザロ・ハモス（1978～）は、今や、ブラジル映画やテレビでは欠かせない有名人となったが、彼が演技を鍛えられたのは、学校よりも、ブラジル最大のパーカッション集団オロドゥンに参加したからだ。シネマ・ノーヴォを主導したグラウベル・ローシャ（1939~1981）もバイーア生まれで、作家アマードの親友だったのだから、バイーア・パワー抜きでブラジル映画を語ることはできないのだ。

では、「サンパウロ才」のほうは、といえば、映画の舞台となったのが、サンパウロ最大のファヴェーラであるエリオボリスであったが、筆者として注目したいのは、映画脚本の原本といえる劇作品“Acorda Brasil（目覚めよブラジル）”のほうだ。この著者はアントニオ・エルミニオ・デ・モラエス（1928-2014）。自称アマチュア劇作家の本業は、セメント、製紙、アルミなどの分野で活躍する財閥グループ・ヴォトランティンの経営審議会会長を長年務めた著名な経営者であるが、様々な社会活動（貧困層への教育普及活動、公衆医療改善活動など）にも積極的にコミットし、フォリャ・デ・サンパウロ紙に毎週コラムを執筆する文人でもあった。

すなわちサンパウロの文人実業家モラエスが著した劇作品からインスピレーションを受けたバイーアの才人監督が映像化し、その主役をバイーア出身の名優が演じた、というのがこの『ストリート・オーケストラ』である。

といった事前の背景知識など全くなしで、この映画をみても、バッハ、ヴィヴァルディ、モーツァルトを演奏する少年少女交響楽団のライブBGMがヒップホップ、という、垣根なき音楽パワーの持つ“人間性回復力”に魅入られることになるのはまちがいない。

（8月、ヒューマントラストシネマ有楽町 他で全国順次ロードショー）



5月18日のジョゼ・セーハ新外務大臣 就任演説の主要部分抜粋

1) ブラジルの外交政策は、ブラジル社会の正当性のある価値観やブラジル経済の利益に基づきブラジル国家の責務として、透明性をもって、かつ、妥協なく行うものであり、一部の政党や一部の同盟国の便宜や趣向に合わせるものではない。外交政策は国家としての価値観に基づき行われるものであり、時の政権や政党により決まるものではない。

2) 我々は、あらゆる国・政権において、民主主義・自由・人権の保護が、国際条約上の義務に基づきなされているかを注視し、また、不介入原則を尊重する。

3) 国連や、ブラジルが加盟する国際機関及び地域機関において、国際紛争が平和的に交渉・解決されるよう建設的に行動するとともに、国際的課題や新たな現実に対応できるための適正化に取り組む。また頻発する金融危機や近年の世界経済減速の解決に努める。

4) ブラジルは、2000年代に自らの自由及び射程を制約し、WTOの枠組みでの多国間の取組を排他的かつ麻痺させ国益を損なったようなことは繰り返さない。(中略) ブラジル以外のほぼ全ての国が二国間協定増大に身を投じた。我々はこの遅延を打破し、これまでの機会損失を取り戻さなくてはならない。

5) 外交上の当面の主な焦点の1つは、政治・経済立て直しとして同じモノサシを有するようになったアルゼンチンとの連携である。他のメルコスール加盟国と共に、必要な点を改めるため、メルコスールを刷新する必要がある。

6) 欧州、米国、日本といった伝統的なパートナーとの交流を拡大する。メルコスール・EU間のオファー交換は、伯の各種生産部門の正当な利益を損なうことなく貿易・投資拡大を促進する協定の締結を進展させる出発点となる。

7) アジアにおける新しいパートナー、特に21世紀の大きな経済現象である中国及びインドとの関係は優先すべきである。アフリカとの交流にも同様に力を入れていく。

8) もう一つ重要な点として、在外ブラジル人コミュニティ及び優れた領事サービス提供をあらためて約束したい。

テメル暫定政権並びに ルセフ大統領弾劾の支持率

6月8日に発表されたCNT/MDA世論調査によると、テメル暫定政権の支持率は11.3%で、過半数の国民が「ル

セフ政権と変わらない」と考えていることがわかった。

テメル暫定政権を「良い」と評価した人は11.3%で、「悪い」は28%、「普通」が30.2%で「わからない」は30.5%だった。

テメル氏の手腕に関しては33.8%が評価したが、40.4%は否定した。

回答者の54.8%は「ルセフ政権と変わらない」と答えており、ルセフ政権より良くなったと考える人は20.1%、悪くなったと考えている人は14.9%だった。「暫定政権もルセフ政権も汚職という面では変わらない」と46.6%の人が考えている。

「ルセフ大統領の罷免は正しいか」「罷免の手続きは妥当か」「罷免は成立するだろうか」との質問には、各々62.4%、61.5%、68.2%が賛同し、6割方が「罷免は正しい」と判断している。

ただ、「ルセフ氏罷免の理由として問われているものは」の問いで最も多かったのは「連邦政府の汚職の責任」の44.1%、「ラヴァ・ジャット作戦の妨害」の37.3%で、本当の罷免理由の「連邦政府の粉飾会計疑惑」と答えたのは約3分の1の33.2%に過ぎなかった。

5月の貿易黒字は64億ドル

6月2日付けエスタド紙によれば、5月の貿易黒字64億ドルは、1989年に統計を取り始めてから単月では最高の黒字額となった。

5月の輸出総額は175億ドル、輸入総額は111億ドルであり、今年1月—5月の累計貿易黒字は196億ドルとなっており、このペースでいけば、今年の年間貿易黒字額は、これまでの最高額である2006年に記録した460億ドルを超えるものとみられている。

ドル高レアル安の為替のおかげで一次産品ばかりか自動車の輸出競争力も回復しつつあり、今後は、さらに繊維製品、靴製品、食肉類、化学製品などの輸出促進にプラス効果が現れるものと開発商工省関係者はみている。

自動車の国内市場に関しては、今年の年間新車販売数予想は200万台前後と低い水準だが、アルゼンチンほか南米諸国向け輸出が増加中であり、GM並びにルノーでは、この輸出向け増産のための従業員募集を数百人レベルで行っている。

一次産品の例では、1月—5月の累計大豆輸出量は3,100万トンと前年同期比34.6%増、5月の鉄鉱石輸出量は前年同月比17%増、輸出金額では37.3%増となっている。

新刊書 紹介



◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

『ポルトガル語圏世界への 50のとびら』

ポルトガル語を公用語としているのは、ポルトガル、ブラジル、アンゴラ、モザンビーク、ギニア・ビサウ、カボベルデ、サントメ・プリンシペ、東ティモールの8か国。マカオも含めた、これらの国々、人々が織りなす歴史、文化はなんとも多様だ。上智大の教員たちが、オムニバス方式で文学や言語、食文化、音楽、映画、演劇から社会問題、環境問題までを読者に解説してくれる、魅力的なポルトガル語圏入門書である。

(上智大学出版 2015年12月 428頁 2,000円+税)

『リオデジャネイロという生き方』 (中原仁・ケイタ☆ブラジル共著)

リオ通い詰め歴30年の音楽プロデューサー(中原)と20年前からリオのサンバ・チームに参加しているDJ・パーカショニスト(ケ

イタ)によるリオ案内。といっても『地球の歩き方』のような浅薄な観光ガイドではなく、庶民視線からの体験的リオ魅力紹介エッセイが交互に収録されていて、読者をリオ・ファンに誘い込む仕掛けだ。リオっ子たちとディープな関係を持つお二人が説くリオ風人生訓もなかなかよらしい。

(双葉社 2016年5月 216頁 1,500円+税)

『ブラジルのアジア・中東系移民と 国民性の構築』

(J・レッサ著、鈴木茂・佐々木剛二訳)

米国におけるブラジル研究のレベルを示す労作(原著1999年)の翻訳だ。後発移民の日系、アラブ系、ユダヤ系の移民一世とその子孫が、「単一のブラジルの国民性」と「自らの新しいエスニシティ」の両方を「交渉」することで、メリットを獲得し、マジョリティの文化とマイノリティの文化の間の関係を「交渉」しながらブラジル人となっていくことを明らかにする。ブラジル人アイデンティティは一律のものでなく多面的である、と明示する。

(明石書店 2016年3月 394頁 4,800円+税)

『ブラジルの光、家族の風景』

大原治雄写真集

ミレーの作品を彷彿させる農村風景写真はアートに達している。「移民写真アー

ティスト”大原治雄が評価されるようになったのは、ここ10年ほどのことにすぎない。1909年生まれの大原は1927年ブラジルに渡り、パラナ州内陸部の開拓農民として生きたが、写真家としては生活風景や自然を画像に記録しただけでなく、アブストラクト作品まで手掛けている。パラナ州第二の都市ロンドリーナの発展記録写真史料としても貴重な写真集だ。

(サウダージ・ボックス 2016年4月 174頁 2,900円+税)

『南米「棄民」政策の実像』 (遠藤十亜希著)

ペルーやブラジルなど南米諸国への移民は、「国家による国民の差別化」、すなわち「棄民」でしかなかったことを政治学からのアプローチで明確化した労作である。史料の山を読み解き、部落問題との関連まで洞察し、人口問題、貧困問題、国内資源の安定化などの諸問題を解決する妙案として南米移民政策が推進されたことを解説した。ただし、先行研究を無視し、非英語圏を英語文献のみで論じる米国心酔姿勢が、ブラジル社会に関する初歩的な事実誤認(地名も読めず、カチマケ抗争も理解できず)をもち、批判が出ている。

(岩波書店 2016年5月 248頁 2,200円+税)

!!「びっくり豆知識」!!

五輪旗は「信頼に足る」都知事に

「粉骨砕身、責務を果たしてまいりたい」と舛添東京都知事は抵抗した。6月6日の「厳しい第三者」である2人の弁護士を伴った釈明会見の一コマ。「不適切」(つまり「公私混同」)は宿泊6件約80万円、飲食14件約34万円。それでも「違法性はなし」。弁護士は問題の発端になった公用車使用や法外な海外出張費は判断する立場にないと逃げた。やっぱり、都知事も弁護士もとんでもない食わせものだった。

筆者はこういう政治とカネの話は、小学生の子供が理解できるかどうか、で考えることにしている。

1)あの弁護士は都知事が選んだ人でしょ。それが「厳しい第三者」なの?

2)ウソをついても学校の先生に叱られることはないの?

3)「公私混同」って、法に触れないから自由にやっていいのね? — 子供にこう聞かれたら、小学校の先生は困ることだろう。世論調査では90%が「納得できない」、75%が「辞職すべき」と答えている。子供たちには改めて正直であれ、と教えるべきだろう。

都知事の東大時代の仲間と夕食を共にした。その男は言った。貧困家庭から這い上がった体験も手伝って「一度手にした頂上は絶対他人に譲らない」。人間としての信頼を失墜しても屁の河

童だ。

このままだとまたとんでもない高額経費が追いかけてくる。次に注目すべきは8月5日開幕のリオ五輪への出張。この旅行は堂々たる「公務」である。リオ市長から都知事への「五輪旗」の引継ぎ式に出席するためだ。「東京のマスゾエ」の顔が世界に放映されたらたまらない。

五輪の開会式と閉会式で2往復、パラリンピックも同様に動けば最大4往復する。その経費は日本発では世界最長のフライトなので、ビジネスクラスでも120万~140万円、ホテルも「2流だったら恥ずかしい」と言った都知事なので、一流に泊まれば最低でも1泊30万円位はする。これに現地の移動、食事、通訳などが加わる。1人300万円として15人だと4500万円位になる。20人だと6千万円だ。これを4回繰り返すと諸経費を入れて2億円前後はかかる計算だ。

結局、舛添都知事は辞職した。もう無駄遣いは結構。都知事はどうせサンバとサッカーぐらいしか知らないだろうから教えてやる。ブラジルには「ジャポネス・ガランチード」(信頼に足る日本人)という有名な言葉がある。日系移民の長年の努力を称えたポルトガル語だ。東京はその“精神”を引き継ぐはずではなかったか。(W)



協会イベントのご案内

参加のお申し込みは、協会ホームページお申し込みフォームにてお願いします。

7/8

高瀬 寧 外務省中南米局長 講演会

演題：最近のブラジルの政治経済情勢（仮題）

経済界からは、ルセフ大統領の下、政治、経済共に全てが停滞してしまった状況が改善されるのではとの期待と希望がある一方、あまり大きな改善はないのではないかと慎重な意見もあります。

言うまでもなく、オリンピックの開催も待ったなしの時期になっており、懸念と期待を背負ったブラジルの今後をどのように見るべきか、高瀬外務省中南米局長の講演は、非常に興味深いものとなることは間違いありません。

日時：2016年7月8日（金） 14:00～15:30

会費：個人会員 1,000円 法人会員 2,000円 非会員 3,000円

場所：フォーリンプレスセンター

住所：千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンター6階

アクセス：東京メトロ 日比谷線・丸ノ内線・千代田線「霞ヶ関」駅 C4番出口
都営三田線「内幸町」駅 A6番出口

7/14

都築 慎一氏 税制セミナー

〔デロイトトーマツ・アドバイザー、ブラジル公認会計士〕

演題：ブラジル税制セミナー（特に移転価格税制について）

ブラジルの税制が複雑怪奇なのは、昨今、大混乱しているブラジル政治の混乱をしのぐものであり、所謂、ブラジルコストの大きな要因として進出企業にとっての大きな問題となっています。

今回の税制セミナーは二部構成とし、前半を①複雑なブラジル税制―実務者へのアドバイス、後半を②移転価格税制について、という演題で行います。

日時：2016年7月14日（木） 14:00～15:30

会費：個人会員 1,000円 法人会員 2,000円 非会員 3,000円

場所：IDB米州開発銀行アジア事務所会議室

住所：東京都千代田区内幸町2丁目2-2 富国生命ビル16階

アクセス：都営三田線「内幸町」駅 A6出口直結、
東京メトロ千代田線・日比谷線「霞ヶ関」駅 C4出口 徒歩3分

——— 皆様のご入会、心よりお待ちしております ———

法人・個人  

新規会員募集中

会員数 2016年6月現在
法人会員 約122社
個人会員 約270名

当協会の活動目的「日本・ブラジル両国間の相互理解、友好関係の促進に寄与する」にご賛同・ご支援頂ける方に、会員となることをご検討いただければ幸いです。

会員特典

1. 協会会報「ブラジル特報」の無料配布
隔月発行、年6回配布。
2. 会員価格にて、講演会等のイベント、ポルトガル語講座に、参加できます（会員限定イベントへも参加いただけます）
3. 会員交流懇親会へ参加いただけます
4. ホームページにて、会員限定情報をご覧いただけます

年会費

入会金は不要です

法人会員 1口 20,000円 / 個人会員 1口 10,000円
(2口以上) (1口以上)

お申込みは
こちらから

《日本ブラジル中央協会公式HP》

<http://www.nipo-brasil.org>

日本ブラジル中央協会

検索

「ブラジル特報」は一部有名書店の店頭でも入手できます。


BRASILICA GRILL
CHURRASCARIA

**ブラジル バーベキュー食べ放題
+ ビュッフェ**

¥5,400 (税抜き/tax not incl.)

ALL YOU CAN EAT | **食べ放題**

予約:

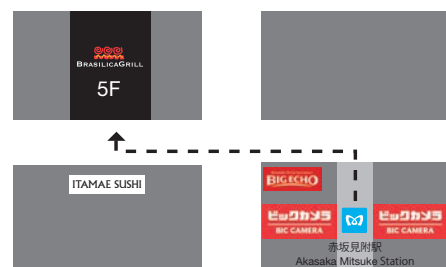
www.brasilicagrill.com

〒107-0052 東京都港区赤坂3-10-4 赤坂月世界ビル5階
Tokyo-to Minato-ku Akasaka 3-10-4 Akasaka Getsu Sekai Bldg. 5F

赤坂見附駅
徒歩2分

赤坂駅
徒歩6分

永田町駅
徒歩6分



溜池山王方面
Tameike Sannou
銀座線
丸の内線

赤坂見附駅 10番出口
Akasaka Mitsuke
EXIT 10

青山一丁目方面
Aoyama Ichome
丸の内線
有楽町線
丸の内線



スペイン・中南米との架け橋として20年 スペイン語・ポルトガル語の イスパニカ

www.hispanica.org

ことばを学ぶ人にも、ビジネスマンにも、高品質で充実のサービスを提供いたします

通訳 翻訳

ビジネスから文芸まで経験豊富な
プロがクオリティの高いサービスを提供

取扱い言語：スペイン語・ポルトガル語
英語・フランス語・ドイツ語
イタリア語・ポーランド語

語学スクール

初心者はもちろん、中・上級者向け
コースも充実の溜池山王教室

www.hispanica-academia.org

- ・通学
- ・通信添削
- ・オンライン※ポルトガル語は通学のみ

書籍の執筆・編集

赴任、出張にはこれ！

安心のカナ発音
英語付き。



ミニマム文法やミニ辞
典も掲載。
三修社刊

中南米の情報提供

スペイン通信社EFEの情報をもとに
中南米の最新ニュースを日本語で

- ・中南米経済速報（週刊）
- ・政治・治安情報“CRONICA”
（月～金の毎日）

企業語学研修

ニーズに合わせた効果的な研修

粒ぞろいの講師が、ビジネスを成功に
導く語学力習得をとことんサポート。実
践的なコミュニケーション力を最大限ひ
きだすレッスンをアレンジします。

有)イスパニカ 〒107-0052 東京都港区赤坂 2-2-19 アドレスビル 1F （銀座線・南北線「溜池山王」駅出口前）

Tel.03-5544-8335 Fax.03-5544-8336 hola@hispanica.org



本場ブラジルの濃厚アサイーで、 おいしく健康な毎日を。



フルッタフルッタはパラ州のトメアス農協CAMTA
からフルーツ原料を直輸入しています。

製品のご注文は 0120-265-726

受付時間：
平日9:00～18:00
（土日祝休）

ホームページからも
ご注文いただけます

フルッタフルッタ

検索

www.frutafruta.com

Stay Sustainable!



GREEN
ECONOMY



ingredients
açai mix

フルッタフルッタはアグロフォレストリーを通して環境と
経済が共存するグリーンエコノミーを実践しています。

“生きた”ポルトガル語が身に付く。



ブラジルでビジネスや生活をする上で欠かせないのがポルトガル語です。
BrAsia(ブレイジア)では、赴任前と赴任後の語学研修を提供します。
講師任せにはしない!現地に精通したスタッフが進捗を管理します。

BrAsia(ブレイジア)の研修プログラム

■ 赴任前ブラジル・ポルトガル語短期語学研修(30～50時間)

現地着任前に最低限の準備を! →国内ですべきは独学の準備と自己紹介、タクシー移動もスムーズに!

※企業への講師派遣(首都圏・名古屋地区・京阪神)も可能です。

■ ブラジル異文化概論&マネジメント講座(半日～1日)

ブラジルの文化、ビジネスの課題を解決! →労働争議は日常茶飯事?各分野の専門講師が課題を解決します!

ブラジルで学ぶ! 短期語学研修プランもご用意!

■ サンパウロ市内提携先での現地語学特訓コース(3～6か月)

キャンパスライフは不要! できればマンツーマンで語学力を一気に高めましょう!

株式会社漢和塾 BrAsia(ブレイジア)事業部 〒104-0061 東京都中央区銀座1-16-7 銀座大栄ビル5階 TEL 03-4360-8627

お問い合わせはコチラ! E-mail: brasia@kanwajuku.com HP: <http://brasia-j.com>



BrAsia代表
小川善久

大阪外国語大学
ポルトガル・ブラジル語学科
1987年卒業
この数年、年に2～3回のペースでブラジルに出張。サンパウロはじめ複数の主要都市を訪問。「事件は現場で起きている!」との考えで、研修会社の責任者としてブラジルを奔走中!



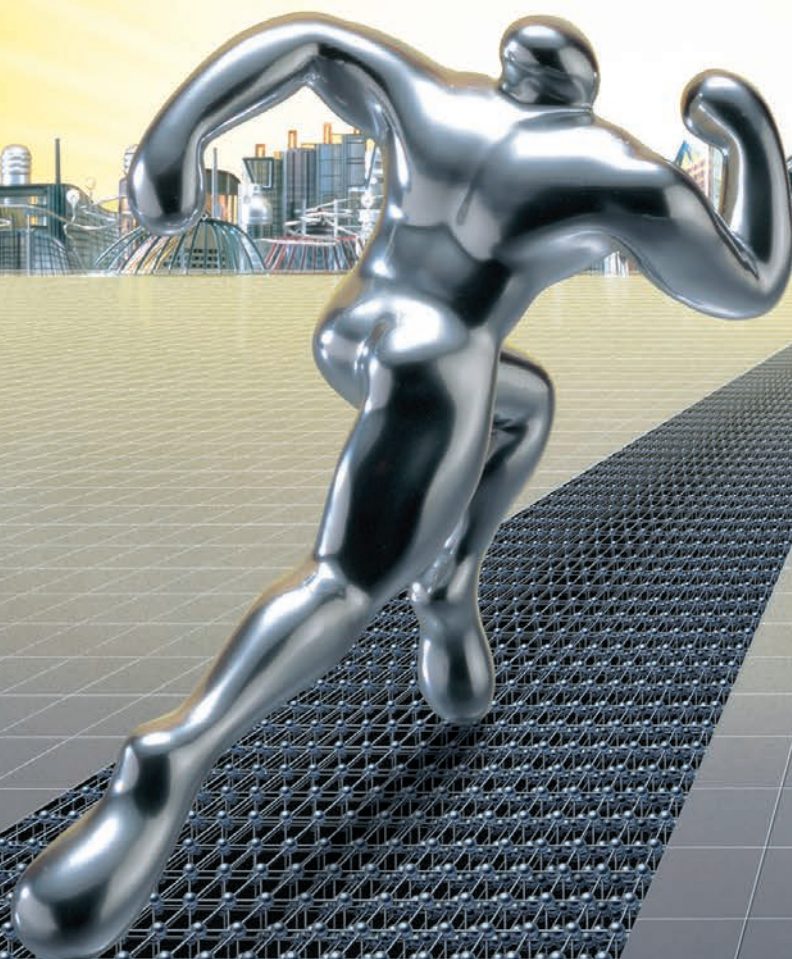
新日鐵住金

あらゆるものづくりを支え、
いつの時代も未来を拓く素材の主役、鉄。
その大いなる可能性を極限まで追求し、
日本と世界の発展、そして豊かな社会の創造に
貢献することが、私たち新日鐵住金の使命です。
世界最高水準の技術とものづくりの力で、
もっとグローバルに、もっと先進の鉄へ。
「総合力世界No.1の鉄鋼メーカー」をめざす、
私たちの挑戦に限りはありません。

www.nssmc.com

限
り
な
い

鉄
の
未
来
を
め
ざ
す
。



世界の鉄へ

しんにつつすみきん